

<文化財の種類 有形文化財・彫刻>

名 称	かわいでら もくぞうえんのぎょうじゃいぞう 河合寺 木造役行者倚像
員 数	1 軀
所在地	大阪府中央区大手前 4 丁目 1-32 (大阪歴史博物館)
所有者	宗教法人 河合寺
年 代	応永 3 年 (1396)

説 明

○概要

本像は真言宗に属する宝珠峯山河合寺(河内長野市河合寺 876)に伝来する役行者像である。役行者(役小角)は7世紀頃の山林修行者で、修験道の開祖として知られる。『続日本紀』文武天皇3年(699)五月条によると、役行者像は呪術に長け、鬼神を従えたと伝わり、「初め小角葛木山に住みて、呪術を以て称めらる。」とあることから、葛城山^(注1)を拠点に活動したことが理解できる。

鎌倉時代初期以前の成立と見られる『諸山縁起』によれば、葛城山においては、平安時代より既に山岳修行の峰入りの記録が見られる。また同史料によれば、役行者が法華経を埋めたという伝承により、葛城山全域に法華経二十八品と関連付けられた経塚や行場が整備された。本像の安置された河合寺は、葛城山を構成するうちの金剛山地の麓に位置する。寺伝では皇極天皇2年(643)の創建とし、応永元年(1311)5月付河合寺寺僧等愁訴状案によればこの時既に600年余の歴史を有したとする^(注2)。

本像は地付からの像高は54.0cm、下駄の歯底面からの総高は80.3cmで^(注3)、役行者像の中では比較的小ぶりに表されるが、その像容は室町時代における役行者像の特徴を備えている。同時代の作例の中では優れた彫技を示し、保存状態も良好である。また特筆すべき点として、本像の像底2箇所にも墨書銘が確認され、応永3年(1396)の年号が記されている。制作年代が判明している役行者像のうち、大阪府下において最古の現存作例である。なお、本像は昭和23年(1948)4月27日付で重要美術品に認定されている。

○形状について

頭部の形状は、頭頂部を団子状に括った頭巾を被り、両耳を出す。頭巾は肩を覆い、背面で円弧を描いて垂下する。面部は額に皺を四条刻み、顎髭を蓄え、頬骨を張らせた瘦身の老相とする。眉をしかめ、眉尻・目尻を垂下させて前方を見据える。開口し、上下歯を表して舌を出

す。耳^{じだ}は不通とする。

両手を胸の高さで屈^{くつび}臂し、右手は掌を内に向け、持物^{じもつ}（後補、現状は錫杖）を執る。左手は掌を仰ぎ、五指を握る。二枚歯の下駄（後補）を履き、両足を垂下させて岩座（新補）上に坐す。役行者像の姿勢については、平安末期の山梨県・円楽寺^{えんらくじ}像や13世紀後半とみられる新潟県金峰神社^{きんぶつじんじや}像など鎌倉時代以前に遡る例に、岩座に腰掛けて一方の足を組み、もう一方を垂下する半跏^{はんか}像が存在するが、室町時代には本像のような倚像の形式が定着している^(注4)。また持物は時代に関わらず右手に杖か錫杖、左手に経卷あるいは独鈷^{とつこ}を執るものが通形であり、本像の左手も本来はこれらの持物を有していた可能性がある。

着衣形式について、大袖衣を着し、その上に袈裟^{げさ}を偏袒^{へんたん}右肩に着す。両肩からマント状の衣を纏い、胸前にて端を結ぶ。大袖衣は両手首を覆い、両膝の外側を通して脛あたりまで垂下する。袈は両大腿部を覆い、膝頭を露出させて両脚間で脛のあたりまで垂下する。鎌倉時代の役行者像の作例では両耳や胸元、膝頭など肉身を露わにする傾向が強いが、室町後期以降にかけては露出を抑えるように変化していく^(注5)。対して、本像の服制は大袖衣と袈裟で肉身部を覆う一方で、耳と膝頭を露わにすることが特徴である。

○品質構造と保存状態について

一木造か・彫眼・素地

針葉樹（ヒノキか）を用いた一木造か。本像は台座裏面の木札に、昭和26年度（1951）に像の解体修理が行われたことが記され、三十三間堂国宝修理所（現・公益財団法人美術院の前身団体の一つ）の資料にその修理記録が残されている。現状表面からの観察では、頭部の構造の詳細は不明であるが、修理記録によれば、両耳後ろを通る線にて、首の一部を含めた面部前半を矧ぐとする。そのため、頭部は面部のみを別材矧ぎとする可能性がある。

頭体の根幹材は縦一材から彫出され、木心を像底中央右寄りに籠める。背面は首後ろから両体側を通り像底に至る線で、根幹材から割り放つ。両体側部はそれぞれ前膊の一部を含めた縦一材とし、両肩口から像底に至る線で矧ぎつける。うち左体側部材は木心を籠める。両前膊半ばより先は、両袖先前面半ばより上方を含む各一材を両体側部材に寄せ、両手首先を別材とする。脚部は両袖前方半ばより下方を含めた縦材を寄せ、両脚の間を縦に通る線で一材を左右に割り放つ、あるいは左右二材として寄せるか。両足先、および右膝頭を別材とする。

保存状態は全体的に良好で、両手足先を含み、当初の様を残すか。瞳の墨描・右手持物の錫杖・下駄は後補で、左手の持物を亡失する。表面仕上げは現状素地を呈し、前述の記録によると、当代の修理により像全体に細かい補修が入り、補修箇所^{きしよ}に古色が施されるほか、各矧ぎ目に^{さびうるし}錆漆が施される。また、同修理で施した錆漆により、像底の墨書の一部が現状目視で確認できない。現状の方座・岩座は上記修理時の新補で、黒漆塗り古色仕上げとする。

○墨書銘について

本像の墨書銘は以下の通り。

(脚部材膝裏面・文化庁所有の写真原版に依る)

「河内國／河合寺／天王寺／頼助作／應永三<丙／子>／阿闍梨行盛／勸進／金剛資頼暹」

ただし現状では同墨書部分下辺が錆漆に覆われ、「阿闍梨行盛」の「行盛」の二字、および「金剛資頼暹」の「暹」字が目視できない。

(体部根幹材像底)

「頼暹〈敬／白〉」

墨書銘の記すところによれば、本像は応永3年(1396)に金剛資頼暹の勸進により、当初より河内国河合寺に安置する像として四天王寺の頼助によって造像されたことがわかる。

○評価

面貌表現については、眉根をしかめ歯を見せて開口する点が奈良県櫻本坊像などに近く、同像のような鎌倉時代の役行者像の忿怒の表現を試みた造形であるとみられる。ただし、本像の場合は口の開きは大きくなく、また眉尻・目尻が外側に向けて吊り下がることで、忿怒相とは異なった神秘的な表情を生む。こうした眉目の吊り下がる特徴は応永17年(1410)に制作された滋賀県北野寺像にも見られるため、本像も室町時代による制作が想定される。室町時代の仏像彫刻においては、役行者像に限らず時代全体の傾向として、鎌倉彫刻の造形を基本に置きつつも、時代の下降に伴う表現の形式化や、造仏に関わる環境や意識の変化などにより、鎌倉彫刻の造形を的確に表現し得ないところが見られる(注6)。本像の面貌が鎌倉時代の役行者像の忿怒相に近いものでありながらも、怒りの表現が抑えられているのは、室町時代における仏像彫刻の形式化の過程のなかで捉えられる。

作風においては、なだらかに下がる肩や、大ぶりの衣文が描く弧線により、像全体に丸みを帯びた印象を与える。矩形の頭部や、起伏を抑えた体部の造形など、面貌以外の部分においても室町時代の仏像彫刻に見られる特徴を表すが、全体として破綻なく堅実にまとめられており、同時代の作例の中では優れた出来栄を示す。細部においては顎髭のうねる様や、耳を中心に渦を巻くような頭巾の衣文が、表情と相まって役行者の神秘性を強調する。特に手足の造形においては、老相の行者像に相応しい筋張った肉身をよく表現しており、その写実性は鎌倉時代の余風を感じさせる。こうした写実的な表現を根拠に、本像の制作年代は室町時代の中でも比較的早い時期に遡ると判断できる。また本像の着衣は、鎌倉時代から室町時代後期にかけての役行者作例の着衣形式の変遷のうち、新旧双方の傾向を有することから、その過渡期の作として位置づけられる。したがって、本像の像容に見られる特徴は、墨書銘に記される応永3年の制作と見て矛盾がなく、本像は室町時代前期における在銘の基準作例として評価できる。

河内地方の在銘の作例に目を向けると、正平8年(1353)銘の和歌山県広利寺木造十一面観音菩薩立像は元来河内国若江(八尾市・東大阪市)の西方寺の像として制作されており、墨書銘により、その作者として四天王寺大仏師の頼円とその子息実円、そして舍弟頼基という人物が明らかとなっている(注7)。また、その翌年である正平9年(1354)銘の壺井八幡宮(羽曳野市)の木造八幡三神坐像及び若宮神坐像には同じく頼円と実円の名称が確認されている(注8)。

このように、14世紀中の四天王寺の仏師集団による作例が周辺地域に複数知られているため、本像の墨書銘の記す天王寺も四天王寺を指すものと考えられる。また、本像の制作者として記される天王寺頼助は、墨書の記述上では四天王寺仏師であることを明言しないものの、河合寺が四天王寺仏師集団の活動範囲にあることや、四天王寺大仏師頼円と「頼」字が共通していることから、天王寺頼助は四天王寺大仏師を称する頼円らの系譜上に位置づけられる可能性がある。

本像は室町時代前期の特徴を持つ彫刻作品として優れた出来栄を示し、同時代の在銘基準作例として位置づけられる。役行者像の在銘作例のうちでは四番目に古く、うち大阪府下の作例としては最古の紀年銘を記す^(註9)。また、墨書銘からは四天王寺に関わる仏師集団の存在が示唆され、14世紀中の河内地方における同集団の活動を検討する上で貴重である。加えて、本像が応永3年の造像当初より河内国河合寺に安置されたことは、葛城山をめぐる河内地方の地域史を検討する上でも意義深い。以上の理由から、本像は大阪府指定文化財にふさわしい。

[註]

(註1) 「葛城山」は金剛山地の一峰である大和葛城山・中葛城山や、和泉山脈の和泉葛城山・南葛城山など、金剛山地および和泉山脈の山名として複数存在するが、本文では『角川日本地名大辞典』「葛城山」項目に従い、これらの主な山峰を含んだ「金剛山地および同山地に連なる和泉山脈の山域全体」を指すものとする。

(註2) 河内長野市教育委員会『河内長野市史 第5巻 史料編2 中世』河合寺文書所収。同史料中に河合寺を指して「六百歳之古跡」の一文がみえる。

(註3) 法量については次の通りである (cm)。像高 54.0、総高 80.3、髪際高 48.2、頂-顎 21.5、面長 14.0、面幅 11.3、面奥 16.7、耳張 15.3、髭長 3.8、肩幅 31.2、胸奥 (右) 16.9、肘張 30.6、腹奥 20.9、膝張 26.3、膝奥 (右) 33.0、袖張 39.0、足長 (右) 13.6、足先開 (外) 25.4、足先開 (内) 14.3

(註4) 役行者像の坐姿については、石川知彦「役行者像 ―岩座に腰掛けて坐ること―」にて、絵画作例の検討や、新羅明神^{しんらみょうじん}など関係する神格との比較を通して、鎌倉末期までの図像において坐像・半跏像→倚像→立像という変遷があったことを提起されている。

(註5) 石川知彦「河合寺木造役行者倚像をめぐって」にて、役行者像の着衣形式のほか、持物・構造・面貌表現の変遷について網羅的に触れられている。

(註6) 室町時代の仏像彫刻の特徴については上原昭一『日本の美術 98 室町彫刻』および根立研介『日本の美術 494 室町時代の彫刻』を主に参照した。

(註7) 広利寺・木造十一面観音菩薩立像は胎内に墨書銘が確認され、上原昭一『日本の美術 98 室町彫刻』に全文翻刻が記載される。そのうち本文にて言及した部分については以下の通り。

「奉 宣持河州若江南条六辻郷西大寺末寺西方寺／正平八年〈癸／巳〉七月一日〈丙／丑〉二二天王寺大仏師／式部頼円 (花押)／舎弟尾張頼基 (花押)／子息駿河実円 (花押)」

(註8) 壺井八幡宮・木造八幡三神坐像及び若宮神坐像のうち、神功皇后坐像像底に以下の墨書銘が記される。

「正平九年〈甲／午〉三月廿日／奉造立施主善定都維那師／作者頼円法眼 子息実円」

(註9) 本像以前に遡る紀年銘を有する像は次の通り。奈良県山本家像 (弘安9年<1286>制作)、山梨県円楽寺像 (延慶2年<1309>修理)、奈良県高雄寺像 (元応元年<1319>制作)。

[参考文献]

三十三間堂国宝修理所「役小角修理図解解説記録」1951年度

『諸山縁起』宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 伏見宮家九条家旧蔵 諸寺縁起集』 1970 所収

上原昭一『日本の美術 98 室町彫刻』至文堂 1974

河内長野市教育委員会『河内長野市史 第5巻 史料編2 中世』 1975

石川知彦「河合寺木造役行者倚像をめぐって」『大阪市立美術館紀要』第11号 1998

西川新次「役行者像から見た修験の世界」『役行者と修験道の世界：山岳信仰の秘宝』 1999

石川知彦「役行者像 一岩座に腰掛けて坐るということ一」『役行者と修験道の世界：山岳信仰の秘宝』 1999

石川知彦・小澤弘『図説役行者一修験道と役行者絵巻』河出書房新社 2000

根立研介『日本の美術 494 室町時代の彫刻』至文堂 2007



正面



斜め左正面



右手



背面



頭部左側



頭部斜め右前面



左袖



脚部



新補以前の脚部材膝裏面墨書（写真提供・文化庁）